

石井記念愛染園の歴史

柴 田 善 守

1 石井十次の事業

「石井記念」の石井というのは、明治期の民間社会福祉の代表者のひとりである石井十次である。明治二十年（一八八八）一医学生であった石井は母子の巡礼の子を預ることから岡山孤児院を創設した。彼は伝道間もないプロテスタントの信仰をもち、生涯を孤児院事業に捧げたのであり、その事業は神の事業であると考えていた。しかし、晩年には孤児院事業に疑問をもつようになった。そのひとつは孤児院における集団養護のあり方であり、「親のない子は子のない親に」といい里親制度にきりかえようと意図して、郷里の日向に三百町歩の土地を購入してここに里親村をつくらうとしたのである。第二に川下においてごみを拾うような孤児院事業よりも川上において孤児の発生しないような対策こそ必要であると考え、大阪南部の貧民街にセツルメントを創ったのである。

これは児童福祉の歴史でもある。収容施設における養護の限界から里親制度への発展、収容の予防として保育所、貧児教育を行うセツルメント事業の創設である。この両者を企図

しながら石井は世を去っている。石井の後半生を支えた大原孫三郎はこの大阪事業を中心に「石井記念愛染園」を創設したのである。

2 大原孫三郎の思想

大原孫三郎は倉敷紡績株式会社の社長であるが、青年期石井十次に会いプロテスタントとなり、石井の岡山孤児院事業に協力している。石井没後、岡山孤児院長となり、石井の事業を継続しているが、孤児院を閉鎖し、大原の事業として石井の精神を継ぐという、いままでのいわゆる「社会事業」でなく、「貧困問題」の研究をしなければならないことを強調する。

大正六年（一九一七）、石井が創設した大阪南部にあったセツルメントを石井記念愛染園として岡山孤児院大阪分院以来の中心であった富田象吉を主任とし、より充実したセツルメント事業を開始するのであるが、このなかに救済研究室をおき、大阪在住の学者小河滋次郎にその指導を依託している。翌七年（一九一八）文部省により東京帝国大学を追われた森戸辰男、大内兵衛を大阪に呼び、八年（一九一九）には

同じく東京帝国大学を追放された高野岩三郎を呼び、大原社会問題研究所を創設している。

この大原社会問題研究所はその後続々と若手の研究者を集めており、そのなかに権田保之助、戸田貞三、来留間鮫三などがあり、日本における貧困問題・社会主義研究の中心となっている。大正十年代にはこれら若者をヨーロッパに留学させ、併せてはげしいインフレーションにあったドイツでは大量の図書を集収し、同研究所の図書館は大量の稀覯本をあつめている。

この研究所は石井記念愛染園の近くにあり、愛染園の活動にも大きな影響をあたえているのである。しかし、昭和九年（一九三四）研究所は東京に移転し、経済関係の図書は東京の法政大学に移され、その他の図書は大阪府に贈られた。この図書は戦争後大阪大学文学部創設にあたり、その蔵書として寄贈されている。

3 十五年戦争と愛染園

昭和初期には愛染園の周辺の貧民街は大規模な住宅改良によって事情は大きく変った。南のいわゆる「金ヶ崎」に貧民街の中心は移り、一時はこの附近に園の移転を考え土地を購入入している。このころ園長富田は外遊しており、とくにニューヨークのヘンリー・スリート・セツルメントに三カ月滞在して、このセツルメントの特色である医療を中心とした事業にとくに関心を示している。

昭和九年（一九三四）の関西大風水害で園舎は被災し、富田自身も堺市にあった家屋を流され、園の事業は一時中断している。間もなく診療所を設け、十二年（一九三七）には二十五床の病院を開設している。十八年（一九四三）には園舎本館が改築完了し、乳幼児相談室、母親学級教室が整備された。しかしこの年一月、園創設者大原孫三郎が没し、つづいて事業の中心であった富田象吉も世を去っている。そして二十年（一九四五）の三月空襲により本館が焼失し、辛うじて病院だけを残して、敗戦を迎えている。

4 第二次大戦後の愛染園

昭和十八年（一九四三）にあいついで理事長、園長を失った愛染園はその後任として大原総一郎、富田夫人エイを決定し、戦後の混乱期を迎えたのである。とくに富田エイの努力は目をみはるものがあるが、過労のため二十二年（一九四七）一月に没している。このエイの活動の背後にはさきにも述べた大原社会問題研究所の庶務主任をしていた鷹津繁義の支えがあった。鷹津は同研究所が大阪府に寄贈した図書の管理を戦中戦後の困難な時期に行ったのであるが、エイ没後愛染園の園長としてその再建を担当することになった。

鷹津は園の諸事業の再開に努力しているが、病院事業の充実と保育所の再開が課題となる。昭和二十七年（一九五二）には財団法人から社会福祉法人にきりかえ、焼失した本館の再建に成功し、保育所を再開している。

このころから鷹津は社会福祉関係の学者の意見を聞き、同地区の調査を実施し、セツルメントとしての事業のあり方を検討している。昭和初期の改良住宅は鉄筋住宅で空襲による焼失を免がれたが、稀少化した住宅事情の中で公営住宅であるにもかかわらず、居住権を売り転住することがあり、居住者は代っていた。このような状況を把握するための調査であった。

しかし、地区の文化は残され、古い貧民街の様相はそのままに継承され、廃品回収の業者が戦前に比較して少くなっているが、この公営住宅はのみや風や南京虫が多発していた。また母子・父子家庭が多く、学歴も低く、長期欠席の児童も多いことが確認された。

これらの調査に参加した大阪大学医学部、大阪市立大学、大阪府立女子大学、大阪社会事業短期大学生によって愛染園学生セツルメントが結成され、愛染園を拠点とする活動が開始され、害虫の駆除、健康相談、子ども会、学習会などを行っている。しかし、この学生セツルメントも間もなく解散された。

5 病院の増改築

昭和三十年代になると社会の安定とともに病院の利用者は増加し、その後半になると外来患者が廊下にあふれ、入院患者のために院長室まで使用するという有様となった。昭和十二年の病院開設以来の院長であった西川為雄を中心とした病

院の全面的な増改築の会議が度々開かれ、理事長大原総一郎の決断と努力によって、四億五千万円の借入れによって昭和四十年四月には二六三床の総合病院を建築している。

このような大きな病院を開設したということは確に高度の医療を行うことができるのであるが、病院経営としては他の大病院と同様な形態をとることになり、いままでもっていた地区との関係がうすれることになる。社会福祉法人愛染園のもつ病院の苦悩は大きい。

そこで地区との関係を強化するために、はやくから行っていた健康相談事業を強化し、地区の人びとの衛生問題に対する指導に意を注いでいる。

6 隣保事業の強化

昭和三十八年、愛染橋保育所は病院増改築のために近くの土地に移転し、同時に児童館を開設し、学童保育も行うようになった。担当の管良介はこの年のいわゆる「釜ヶ崎騒動」のあとの荒廃した愛隣地区で放置されている乳幼児に関心をもち、子どもたちのための「青空保育」を企画している。これが「今池子供の家」「わかくさ保育園」となっていくのである。初期の「青空保育」ではドヤ街の空地で仕事にあふれた労働者たちが酒のみ、ばくちをしているなかで遊ぶ子どもたちを集めるという仕事からはじまり、まだねこんでいる母親を起すことから始まったという。はじめはうるさく怒っていた母親たちが、やがてわずかであるが金品をもってきてお礼

をいうようになった。これは社会福祉の原点だと思う。現在では大阪南港にも保育所を経営する多彩な事業を営営するようになったが、病院事業との間の協働事業にも悩みは大きい。

7 あとがきにかえて

明治二十年（一八八七）石井十次が岡山孤児院を創めて約百年が経過した。明治四十年（一九〇七）に大阪事業をはじめ、これが南部におけるセツルメント事業に発展し、石井没後大原孫三郎がこれを継承し、孤児院を解散する方針をとるとともに大阪事業に石井記念愛染園を創設し、地区教化事業としてのセツルメント事業を継承し、この事業から大原社会問題研究所が発生する。そして昭和十二年（一九三七）医学を中心としたセツルメント事業に内容を変更したが、第二次大戦末空襲により医療施設のみを残して敗戦を迎える。この間に理事長は大原総一郎となり、昭和二十八年七十床の病院となり、健康相談事業を充実し、保育所を開設している。またこのころから学生の参加で地域活動を行っている。そして昭和四十年（一九六五）には病院を増改築して、二六三床をもつ総合病院とし、一方隣保館は保育所三、児童館二を営営する大施設になって今日に至っている。その社会的背景によってその様相を変えるめずらしい民間社会福祉の例である。

およそ、民間社会福祉は社会の近代化とともに発生する。わが国においても明治になってからである。その例が石井の岡山孤児院であり、多くは収容施設である。このような収容施

設から貧困地区に定住して貧困者と友人となり教化活動を行うセツルメント事業となるのであるが、これが石井記念愛染園の事業である。大原孫三郎は「石井の精神をつぐ」といっている。戦争を経て日本国憲法は社会福祉の国家責任を謳い、社会保障が発展充実するに従い、国の様相は病院の拡充と隣保事業の発展を配慮している。これは民間社会福祉そのものの歴史であるが、これを石井の孤児院から連続しているところに石井記念愛染園という一事業の歴史の特色があると思う。

しかし、石井十次というひとりの熱烈なキリスト教の信者にはじまり、あたかも信仰集団であった岡山孤児院、大原孫三郎という実業家の理想主義と善意に支えられた戦前の石井記念愛染園、戦後を再興した大原総一郎と信仰と理想をもつ人たちがあとをつぎ、時代の変遷に应运ってきたのである。が、組織の拡大、事業の多様化、従事者の増加にもなつて定款にある「キリスト教主義」がどれだけ貫かれているかという悩みがときとして見られるのである。また事業の拡充、多様化とともに大阪事業のはじめからあった地域との結びつきが薄れており、園のそれぞれの事業の連絡も少くなっているという不満もある。

社会福祉というものは、社会福祉の効率性をもとめればもとめるほど社会福祉そのものから離れるという矛盾をもっている。社会の人間の本質的矛盾を対象とするからである。